

発刊の挨拶

日本陸水学会近畿支部会誌「陸水研究」発刊にあたって

古武家善成

日本陸水学会近畿支部会は支部会誌「陸水研究」を発刊することになりました。支部会誌の構想は三田村緒佐武前支部会長の発案によるものですが、三田村前支部会長から支部会の運営を引き継がせていただいた私自身も大いに賛同しました。その理由は以下に述べるのですが、いずれにせよ、役員の皆様の協力のもと総会において支部会会員の皆様に賛意をいただき、ここに支部会誌「陸水研究」が産声を上げることができました。

近畿支部会は、近畿2府4県の陸水学会会員有志等の努力により創設され、第1回研究会が1990年3月に大阪府立大学で開催されました。第1回研究会の講演要旨集をあらためて開きますと、物理、化学、生物の各分野から合計14題の発表が行われたことがわかります。発表者には故鈴木紀雄先生をはじめ懐かしいお名前も並んでいます。

それから24年、日本はバブル崩壊後の“失われた20年”と言われる長い経済低迷期に入り、その初期に阪神・淡路大震災（1995年）、後期に東日本大震災（2011年）という大災害を体験しました。その結果、都市直下型地震の阪神・淡路大震災では巨大都市の脆弱さ、大津波と原子力災害を伴った東日本大震災では日本の環境・エネルギー戦略の危うさが露わになり、現代社会に生きる私たちは意識の“パラダイムシフト”を迫られています。

このような社会の激動期において、研究者集団である学協会はどのような社会貢献をすべきか。日本陸水学会や近畿支部会も、アカデミーとはいえ社会の中で機能し

ているがゆえにこの問いから逃れることはできません。アカデミーなのでその分野の学問的到達点を前進させる義務を負っていることは当然ですが、その成果をいかに社会へ還元していくかを考えることも同時に大変重要なことです。陸水学会が古くは長良川河口堰建設問題で反対意見を表明し、今また福島第一原発における地下水流入問題で凍土遮水壁設置に疑義を呈し対案を示したことは、社会貢献の面から大きく評価できます。

このような社会への情報発信は時々々の声明等の方法でも可能です。しかし、常に利用できる手段を備えることに勝るものはありません。その意味で、当近畿支部会はウェブ上のホームページとともに学会誌という常設の情報発信のプラットフォームを持つことができたことを嬉しく思います。私は、会誌発行の目的の中で「経験豊かな研究者はもとより若手研究者や市民の研究発表の場にする」と書きました（日本陸水学会近畿支部会ホームページ）。それは、本会誌が通常の学会誌として機能するだけでなく、市民の発表の場となり市民に開かれた学会誌になることを目指しているからです。この会誌を専門家と市民の情報交流を通じた社会への情報発信の場にしていきたいと考えています。

支部会誌に関しては、東海支部会の「陸の水」が大きく先行しています。本誌では、それを先達としながらも近畿支部会としての特徴を出していければと思います。近畿支部会会員の皆様には、支部会誌「陸水研究」の充実に向け今後ともご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。